

平成30年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
 (次期学習指導要領に向けた実践研究)
 成果報告書 (概要)

受託団体名
国立大学法人群馬大学

1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
国立大学法人 群馬大学	特別支援学校	知的障害	群馬大学教育学部附属特別支援学校 (ぐんまだ いがくきょういくがくぶふぞくとくべつしえん がっこう)

2. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成 30 年 7 月	○第 1 回運営委員会 <ul style="list-style-type: none"> 6 月までの授業実践についての振り返り 小学部「みつけてしらせようマークのひみつ」 高等部「わたしたちのまちをきれいにしよう」 現状や課題についての共有 計画の妥当性の確認 図書館の運営主体である附属小学校と協力体制についての確認 	<ul style="list-style-type: none"> 本校の図書館利活用の実態や現状をとらえ、本事業の方向性について共通理解をもつことができた。 打合せの仕方や連絡系統を確認し、具体的な連携を円滑に推進できるようにした。
平成 30 年 8 月	○第 2 回運営委員会 <ul style="list-style-type: none"> 授業実践と今後の取組について、時期や内容の検討 消耗品等の購入について検討 	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な授業実践の日程や内容、関連する購入物品等を定めるとともに、図書館担当職員と新規購入図書の選定や共同管理について打ち合わせ、助言を得た。
平成 30 年 9 月	○授業研究会① <ul style="list-style-type: none"> 校内における授業公開と授業研究会の実施 (群馬大学教育学部 准教授 河内昭浩先生より指導・助言) 中学部「おもしろ絵巻をつくろう」 	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究会において図書館機能をどのように活用するかという点を検討し、次回の授業構想に生かす内容を確認した。

	<p>高等部「本紹介バトルをしよう」</p> <p>○特殊教育学会への参加 (特別支援教育における読書活動についてのシンポジウムへの参加・意見交換)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業実践の考察から、本題材が「学習センター」としての機能を活用した実践となることを見出した。 ・授業における図書館機能の活用の留意点や配慮事項について検討することができた。
平成 30 年 10 月	<p>○附属小学校の保護者ボランティアによる「読み聞かせの会」への参加計画を作成、参加開始 (年度末まで継続)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全 13 回参加 ・附属小学校担当者と保護者の打合せに参加 <p>○授業検討会 小学部「ことばやからだであらわそう」 中学部「みんなに紹介しようわたしのおすすめの一冊」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業実践についての内容や学習活動についての検討 (群馬大学教育学部 准教授 河内昭浩先生、准教授 菅生千穂先生より指導・助言) 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続して参加可能な日程について打ち合わせる等、附属小の担当者と連携することができた。 ・読書活動を取り入れた授業の展開や工夫した点について検討し、実施に向けた改善につなげることができた。
平成 30 年 11 月	<p>○授業研究会②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の公開研究会において、対外的に授業の公開 小学部「ことばやからだであらわそう」 中学部「みんなに紹介しようわたしのおすすめの一冊」 ・授業の振り返りと実践の考察 (群馬大学教育学部 准教授 河内昭浩先生、准教授 菅生千穂先生より指導・助言) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業後の意見交換や振り返りをとおして、「学習センター」としての機能を活用した実践として評価し、今後取り組んでいくべきことや実践の価値を見出した。
平成 30 年 12 月	<p>○授業研究会③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内における授業公開と授業研究会の実施 中学部「読んで伝えよう」 <p>○第 3 回運営委員会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践の中間評価と今後の実践についての協議 (新潟大学教育学部 准教授 足立幸子先生、群馬大学教育学部 准教授 河内昭浩先生より計画の形成的評価と今後の実践の方向性について指導・助言) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業実践を含めたこれまでの取組の成果と課題について、全教職員で共有することができた。 ・実践の中間評価として、今後更に取り組んでいくべき実践や内容についての方向性を見出した。

平成 31 年 2 月	<p>○授業研究会④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内における授業公開と授業研究会の実施 高等部「じっくり読んで紹介しよう」 <p>○第 4 回運営委員会</p> <p>(新潟大学教育学部 准教授 足立幸子先生、群馬大学教育学部 准教授 河内昭浩先生より、今年度の実践についての総括的評価と次年度計画についての指導・助言)</p> <p>○次年度計画の作成と第 1 年次の報告書作成</p> <p>(第 4 回運営委員会の内容を踏まえた次年度計画の見直しと反映)</p>	<p>・実践の総括的評価として今年度の取組や先進校視察の内容を共有し、学部協議を持って、次年度の取組内容や具体的な計画について協議することができた。</p>
-------------	--	--

(2) 研究課題

図書館機能の利活用や読書活動が必ずしも十分とは言えない知的障害特別支援学校において、図書館機能を利活用した授業や読書活動の充実を図ることで、言語能力等を育成することについて検討する。

(3) 研究の概要

本校は、併設する附属小学校が運営する共用の図書館があり、蔵書数や環境面で恵まれているが、図書館機能を学習支援や情報活用等に積極的、計画的に活用していくことが課題であった。そこで、言語能力や情報活用能力を育成するために、「読書センター」としての機能の利活用はもとより、「学習センター」や「情報センター」としての機能の計画的な利活用を図り、読書活動の充実を目指した。そして以下の 3 点について実践をとおして明らかにすることとした。

- (1) 児童生徒の学習活動の充実のために、附属小学校の図書館担当職員と連携する際の留意点や配慮事項を考察する。
- (2) 知的障害のある児童生徒が「学習センター」や「情報センター」としての機能を活用して学習するための支援方法とその効果を検討する。
- (3) 各授業における児童生徒の変容を確かめ、年間をとおした児童生徒の変容を評価する方法について検討する。

上記の 3 点について実践をとおして考察するために、10 の授業実践並びに読み聞かせへの参加等を行った。また、外部講師を招いた授業研究会や運営委員会を行い、「学習センター」としての機能や「情報センター」としての機能を活用するための、図書館担当職員との連携や ICT 機器等の活用の有効性等の助言を受け、本校における図書館機能の拡充の可能性と読書活動の充実について検討した。また、先進校の視察を行い、読書活動の先進的、継続的な取組の状況を調査した。

(4) 研究の成果

1 附属小学校の図書館担当職員との連携について明らかになったこと

授業の構想や実施の際に、附属小学校の図書館担当職員と本校教員が児童生徒の興味や関心、授業のねらいや目標を共有したうえで、授業で扱う図書の選書や、必要な図書の貸出、教室での配架について助言を受けることが、円滑な授業準備や児童生徒の学習活動の充実につながった。

2 図書館機能を活用して学習するための支援方法とその効果について明らかになったこと

自作の大型絵本や学習に用いた成果物等の掲示、マルチメディア図書や書画カメラ、タブレット端末を活用した。これらにより、主体的に学習に取り組む姿を引き出すことができ、授業のねらいや個々の学習のねらいに応じた学習活動が展開できた。また、文字を読むことに困難さがあっても、音声と視覚的効果によって本を読んで、内容の楽しさを共有したり、個々のペースでじっくりと読んだりできるなどの学習効果を確認した。こうした機器を活用しその効果を検討していくことは、知的障害特別支援学校における図書館の「読書センター」と「学習センター」としての機能の強化につながると考察した。

3 児童生徒の変容と年間をとおした評価について

「読み聞かせの会」への参加をとおして、絵本の世界に入り込むように、読み手の声やページに集中して聴く児童の姿が見られ、両校保護者からも読み聞かせの効果を実感する声を確認した。また、読書活動を取り入れた授業実践をとおして、単語をまとまりでとらえて読む、家族に読み聞かせを行う、文章や言葉に着目して読む、借りる本の種類が豊富になった等、児童生徒の言語能力や学習意欲の高まりを確認した。

(5) 課題と今後の方策

1年次をとおした今後の課題は、以下の2点である。

- ① 読書活動をとおして、児童生徒にどのような言語能力の変容があったかを客観的に確かめたり、評価したりする方法の検討が必要である。また、児童生徒の図書資料の利用状況の変化だけでなく、読み方や読書の質の変化についても評価をしていけるようにする。
- ② 小学部、中学部、高等部の各実践のそれぞれの評価を行い、次時の学習につなげるだけでなく、年間をとおして計画的・継続的に実践を行っていけるようにする。

こうした課題を受け、2年次以降は、個々の読書の実態を的確に把握するための「読書カルテ（案）」を作成し、児童生徒の実態により即した選書や授業での活用につなげていくことが必要だと考える。また、個別の指導計画や学校行事等との関連を踏まえたカリキュラム・マネジメントをとおして、学校の年間指導計画に位置付け、図書館機能を十分に発揮し、目指す資質能力の育成につなげていく。そのために、「図書館利用計画（案）」を作成し、全職員で組織的かつ計画的に実施できるようにしていく。

さらには、自校の課題だけでなく、県内外の知的障害特別支援学校の図書館の利活用の状況や読書活動の実態、課題を調査し、参考としながら、2年次の実践を継続し積み重ねていく。